

昭和47年度日本気象学会奨励金贈呈

本年度の学会奨励金受領者は、次の3件に決定し、新潟商工会議所において開催の秋季大会第2日(10月25日)贈呈式が行なわれた。

記			
带状降雨帯の研究	杉山清春	計)の実験的研究	地迫良一(宇都宮地方気象台)
	竹内 新(下関地方気象台)	主として暖候期のうず状じょう乱の研究	
リファレンスサイクロメーター(WMO型通風式乾湿		深津 林	
		清水喜允(福井地方気象台)	

日本気象学会奨励金受領者

選 定 理 由 書

奨励金受領者 杉山清春 (昭和17年生)

竹内新 (昭和23年生)

研究題目 带状降雨帯の研究

選定理由 杉山清春会員は、昭和39年東京理科大学卒業後、福岡管区気象台をへて、現在下関地方気象台技術専門官の職にあり、竹内新会員は、昭和47年気象大学校を卒業し、同じく下関地方気象台に現業班員として勤務している。

杉山会員は、温帯低気圧の暖域、あるいは寒冷前線の近傍に带状降水域群が生ずることに着目し、地上の前線にそって波長100km程度のヘルムホルツ型の不安定波を仮定した前線モデルを考へて、この带状降水域の生成機構を説明した。杉山、竹内両会員は、ひき

つづきこの不安定波の力学的性質を明らかにし、同時にレーダー解析等の実測結果を考慮に入れて新しい温帯低気圧のモデルを作成し、又带状降水域と豪雨との関連をしらべようとしている。

両会員のめざしている研究は、温帯低気圧と前線に関する気象力学、メソスケール気象学の発展に新しい貢献をもたらすことが期待される。地方気象台の多忙な現場勤務の中で行なわれている両会員の研究は、学会として推進、援助に価するものと考え、本学会はここに両会員に奨励金を贈るものである。

奨励金受領者 地迫良一 (昭和23年生)

研究題目 リファレンスサイクロメーター(WHO型通風式乾湿計)の実験的研究

選定理由 地迫良一会員は、昭和46年気象大学校を卒業後宇都宮地方気象台技術課に勤務し現在に至っている。その間、現業勤務のかたわら、気象大学校在学中に試作し、実験的研究を進めたリファレンスサイクロメーター(WHO型通風式乾湿計)の性能について、野外実験に重点をおいて検討を進めてきた。

この測器は、乾湿計常数に関する理論的研究成果および実験的研究成果に基づき設計され、定常観測器として使用することにすぎWMO、CIMO作業委員会に諮問されているもので、設計に付随する技術上の問

題、室内実験で達成できない自然条件下の問題等いくつかの検討を要する事項が指摘されている。

地迫会員は、これらの事項のうち、実用上の問題点に重点をおき、同測器が野外観測に使用された場合の自然環境条件の影響を調査し、現用測器(気象庁型通風乾湿計等)との比較を行ない、環境条件のうち特に日射の影響が、理論上また室内実験結果から予想された以上に大きいことを明らかにし、その対策を確立する研究を進めている。

地迫会員の研究成果は、湿度測定技術改善と

WMO の作業決定に寄与することが期待されているが、地方気象台の現業勤務のかたわら、このような実験的研究をすすめることは装置、資材の入手の面でも

困難が多い。本学会は、めぐまれない条件を克服しつつ、本測器実用化をすすめる地迫会員の研究活動を援助するために、ここに奨励金を贈るものである。

奨励金受領者 深津林 (大正14年生)
清水喜允 (昭和14年生)

研究題目 主として暖候期のうず状じょう乱の研究

選定理由 深津林会員は、昭和19年気象技術官養成所専修科を卒業後、輪島測候所、名古屋地方気象台をへて現在福井地方気象台主任技術専門官の職にあり、清水喜允会員は、昭和36年気象大学校卒業後、気象庁予報部、柿岡地磁気観測所、新潟地方気象台をへて現在福井地方気象台技術専門官の職にある。両会員を中心とする東尋坊レーダー観測所のグループ（両会員ほか3名）は、多忙な現業勤務のかたわら日本海上に出現する冬期のうず状エコーについて、レーダー解析を積重ね、これが降雪現象の主要なトリガーの働きをしていることを明らかにし、レーダー記録と各種の気象資料にもとづいてうず状エコーの形成過程とライフサイク

ルを支配する力学的条件を解明する糸口をつくった。

現在同グループは季節を暖候期に移して、同様な手法を発展させる研究をすすめようとしている。同グループが実験的に解明しようとしている積雲対流からなるうず状エコーの研究は、気象力学の中心課題の一つであり、中規模気象現象の研究発展にも大きく寄与することが期待される。

現業勤務のきびしい条件の中ですすめられている同グループの研究は学会として推進、援助に価するものである。ここに本学会は、同グループの研究推進者である深津、清水両会員に奨励金を贈るものである。